

2023 年度日本独文学会春季総会・研究発表会実施報告 (Y. Tomishige) [J]

2023 年度日本独文学会春季総会および研究発表会は、6 月 3 日と 4 日両日にわたり、対面のみで開催された。会場は明治大学駿河台校舎のリバティール・タワー10 階および 11 階だった。春季学会の全プログラム対面開催は 2019 年の学習院大学以来、実現していない。新型コロナの 5 類（季節性インフルエンザ並み）移行後初の対面学会ではあったが、まだ懇親会はおこなわれなかった。しかし、6 月 2 日・3 日午前に台風 2 号に見舞われ、加えて懇親会不開催であったにもかかわらず、総計 327 名の参加者に来場いただき、盛会だったと言えるのではないだろうか。

ただし、近年の気候変動で台風の時期が早まっていることからすると、やはり 5 月中の学会開催の方が無難ではないかと思われる。今回特に西日本方面からの参加者の中に、台風のせいで途中足止めされたり、各所で長時間行列に並ばざるをえなかったりと、到着までに大変苦労された方も多かったようでもあるので、できることならぜひ台風シーズン前の 5 月開催であって欲しいと念ずるものである。

明治大学で報告者が経験した日本独文学会開催は、1996 年、2009 年、そして今回で三度目だった。この間実施現場の仕事には著しい変化があって、その都度前回のやり方がそのまま踏襲されたことはなかったように記憶する。96 年の学会では、まだ会場案内の掲示物ばかりでなく、各研究発表会場における発表題目・発表者名の掲出等、何から何まで手書きだった。これは能書家の先生ただお一人にお願いして毛筆で書いていただくという、特定の方に多大の御苦労を強いざるをえず、他もまた万事が万事アナログの時代だった。09 年担当の際は、ある程度設備・機器のデジタル化も進み、掲示物等はすでにパソコン作成になっていたが、会場の機器面ではまだ今日のように教室の操作卓で全部完結というわけにはいかず、別途用意しておいた機器を教室に持ち込む必要もあったし、その機器に不具合も発生したりして、何人ものスタッフが会場と会場から少し離れた実施本部の間を走り回って汗をかいたと記憶する。それに比べれば、今回は全機器が各会場の操作卓で操作可能だったので、マイクのバッテリー切れがいくつか出た程度で、特に混乱というほどのこともなく、当日の仕事は随分と単純でストレスが感じられなかった。これには、実施本部が各会場と近接していたことも大きく与っていたらう。

学会の実施には明治大学専任の日本独文学会会員があたった。本学には「明治大学ドイツ文学会」という、七つの学部それぞれに所属するドイツ語・ドイツ文学・ドイツ文化等の関連教員をメンバーとする任意の親睦団体があり、そのうちの日本独文学会会員 16 名が実施委員会として準備と運営にあたった。つまり、ほぼ全学部の教員の協力体制（二学部には関連教員不在）でこの度の学会は実施されたということである。

開催一年ほど前にその明大ドイツ文学会総会において、同会会長の文学部渡邊学先生が

実施委員長として選任された。具体的作業は、学会理事でもある同学部の岡本和子先生の下で始動したが、このお二方を中心にまず周到な担当割り振りを作っていただいた。幸いかなり人員が豊富ということもあって、各担当者への業務負担は以前に増して著しく軽減され、担当者ごとの事前準備も滞りなく予め適確におこなわれていたため、学会当日の業務はハード面の準備を除けば、万事何の苦勞もなく進んだように思われる。もちろんこれは、岡本先生の事前準備が万全だったからこそでもある。

学生・院生アルバイトは第一日目 17 名（午前 9 名・午後 8 名）、第二日目 12 名（内 3 名は前日も働いてくれた大学院生）に来てもらい、会場の運営に大いに役立つ働きをしてもらった。今回のように、対面学会に全国から多くの研究者が一堂に会する現場に立ち会うという経験は、彼らにとってなかなか得難いものになったのではないかと思われる。この学生・院生アルバイトの手配と指示は福間具子先生の担当で、学生・院生とのコミュニケーションに腐心していただいた。

このように今回の学会運営は非常にスムーズにおこなわれたが、その前提となっていたのは、明大ドイツ文学会という親睦団体の存在であり、各教員の学生・院生との信頼関係であることを改めて強く感じさせられた。

今回の学会では、参加費の事前払い込みが実施されたこともあり、当日支払いの数はさほど多くなく、また領収証の簡素化が実現したこともあって、当日支払いの方に芳名帳記入はお願いしたものの、受付カウンター前での渋滞は起こらず、大変スムーズな人流が実現したと思う。このことは理事会の簡素化決断の賜物だったのではないだろうか。

ただ一点改善の余地があったとすれば、Infotisch 会場の位置に関してである。今回は本部と同じ 10 階ではあったが、南奥にある 2 つのゼミ室しか用意できなかった。ここが少し目立たな過ぎたように思われる。メインの諸会場と比べ、そこは移動の動線からすると大きく外れ、奥まった死角になりがちな場所であったため、なかなかそちらに人が流れて行かなかった印象がある。次は動線内に設置するのが望ましいが、大学の教室貸し出し方針が大学・OB 会等を優先するものであるため、二つのフロア全体を借り切ることができなかったことにすべて起因していたので、次回は教室使用申請を早めるなどの措置が必要かもしれない。

また、かつて参加者各個に受付で配布していたような大学 PR 誌や地図等も、今回は一切用意しなかったことも付記しておく。今では参加者は、各自情報ツールを手にしていらっしゃる時代なので、余計な紙媒体のお持たせなど不要と判断してのことだった。ただし、御茶ノ水という場所柄、岡本先生が気をきかせて、古書の街神保町 PR 誌を受付テーブルの隅に置いて、興味のある方は自由にお持ちになれるよう準備していただいた。このような配慮は、会場の装飾にもなるし、他大での学会開催時にもあれば、情報源としても私個人としては大変ありがたいと思うが、これもまたケータイ一つで事足りると考えられる向きもあるかもしれない。

そして最後に、会場のリバティ・タワーからは 4 月より喫煙スペースが完全撤去されて

いたことを付記しておく。明治大学キャンパスには少数ながらまだ喫煙所があるにはあるのだが、この校舎からは離れた別の建物にあるため、会場とそこまでの往復の労を考えると、愛煙家をとともそこへはご案内できなかった。大変申し訳なかった。

富重 与志生（明治大学）

0195

作成日 : 2023/09/10